

Nara Women's University

内モンゴル・ホルチン地域におけるモンゴル族の固定式住居に関する研究:半農半牧の地域を対象として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-06-21 キーワード (Ja): ゲル, バイシン, ホルチン半牧半農地域, マンション, モンゴル族, 居住空間, 現代化, 生活環境, 定住化, 内モンゴル自治区, 農牧業 キーワード (En): 作成者: 玉嬌 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/4706

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏名	イジョウ		
論文題目	内モンゴル・ホルチン地域におけるモンゴル族の固定式住居に関する研究 一半農半牧の地域を対象として一		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
内容の要旨			
<p>本研究は中国・内モンゴル自治区・ホルチン地域を対象とし、半農半牧を営むモンゴル族の固定式住居の変化過程、居室の使い方などについて、地域的特徴を明らかにしたものである。論文の概要は以下の通りである。</p> <p>1章「研究の背景と目的」では本研究の目的と構成を説明している。ホルチン地域は内モンゴル自治区の東にあり、河北省、遼寧省、吉林省に接しており、早くから漢族の影響を受けた地域である。内モンゴル自治区内では、最も早くからモンゴル族の定住化が進んだ地域であり、内モンゴルの他地域と比べて半農半牧世帯が多い。ホルチン地域は赤峰市、通遼市、ヒンガン盟から構成されており、面積は各々9万275km²、5万9535km²、6万7706km²、赤峰市は丘陵部が45.6%、通遼市は平原が70.2%、ヒンガン盟は山地が95%を占めている。人口は各々434万人、314万人、161万人、モンゴル族の比率は19.1%、46%、41.3%である。</p> <p>本論文の目的は、ホルチン地域で半農半牧を営むモンゴル族を対象に、固定式住居の平面、変容過程、居室の使い方、呼称、材料、敷地の使い方などを調査し、三地域（赤峰市、通遼市、ヒンガン盟）の共通点、相違点を明らかにすることである。</p> <p>2章「内モンゴル半農半牧地域の農牧業」では、赤峰市、通遼市、ヒンガン盟の特徴を既存研究を下に把握し、半農半牧世帯の生業及び年間の暮らしについてまとめている。一般的な農業のサイクルは、4月に播種、10月に収穫で、年間の約半分は農業に従事する。牧畜では10月から4月にかけて出産時期であり最も忙しい。半農半牧の場合、年間を通じて農業、牧畜の作業が同じ箇所で行われるため、草原地域で暮らすモンゴル族のような季節ごとに移動する生活とは大きく異なっている。</p> <p>3章「赤峰市ベーリン右旗のチャガンオスガチャにおけるモンゴル族の住居」では、赤峰市・ベーリン右旗・ジラガリンジャムソム・チャガンオスガチャで暮らすモンゴル族を対象に農牧業の実態、固定式住居の状況と変化過程（平面、材料、居室の名称）、敷地の使い方を明らかにしている。調査は2012年8月に実施し、調査対象家屋は12世帯である。明らかにされ</p>			

た主な内容は以下の通りである。住宅の平面は一室、一行二室、一行三室、二行三室、二行多室の5タイプに分かれた。住宅の材料は、ブムブゲングル、ジムンゲル、ドーチャングル、バンチャングル、レンガ造パイシンの6種類が見られた。また、住宅の平面タイプと住宅の材料には関連性が見られた。居室の使い方は、一室から二室になる際、調理、洗面と寝室、接客、食事、宗教儀式の二つに分かれ、三室になる際、年長者の寝室が分かれ、そこで接客もなされている。二行三室になると住宅が北側に拡張され調理が北側に移り、二行多室では調理、食事、接客、宗教儀式が専用の居室で行われるようになっていく。敷地は農地と一体になったものと、農地と住宅敷地が別の2種類見られた。

4章「通遼市左翼後旗スブンガチャにおけるモンゴル族の住居」では、通遼市・左翼後旗・ノゴステ鎮・スブンガチャを対象に3章と同じ内容を調査している。調査は2012年6月に実施し、調査対象家屋は20世帯である。明らかにされた主な内容は以下の通りである。3章と同じ内容については省略する。住宅の平面は一行二室、一行三室、一行四室、二行三室の4タイプに分かれた。住宅の材料は、フルスゲル、シャベルゲル、ピースゲル、ジュンゲルの4種類が見られた。また、住宅の平面タイプと住宅の材料には関連性が見られた。敷地は農地と一体になったものと、農地と住宅敷地が別のものに分かれるが、後者には道路でさらに敷地が分割されたものがあった。生業とパイシンの関係を見ると、半農半牧世帯の方が住宅規模が大きかった。これは半農半牧世帯の方が所得が高いからだと思われる。

5章「ヒンガン盟右翼前旗タブンゲルガチャにおけるモンゴル族の住居」では、ヒンガン盟・右翼前旗・デブスグ鎮・タブンゲルガチャを対象に3章と同じ内容を明らかにしている。調査は2016年7月に実施し、調査対象家屋は20世帯である。明らかにされた主な内容は以下の通りである。住宅の平面は一行二室、一行三室、二行多室の3タイプに分かれた。住宅の材料は、茅草房、ピースゲル、チョロンゲル、ワーファンの4種類が見られた。また、住宅の平面タイプと住宅の材料には関連性が見られた。敷地は農地と一体になったものと、農地と住宅敷地が別の2種類見られた。

6章「内モンゴル・ホルチン半農半牧地域におけるモンゴル族の住居」では、3章から5章の調査結果を踏まえ、半農半牧地域における固定式住居の共通点、相違点について全体的にまとめている。明らかにされた主な内容は以下の通りである。3地域とも移動式住居から固定式住居に変化しているが、固定式住居になっても以下の点は引き継がれている。一つ目は入り口で、住宅の南もしくは南東にある。二つ目は住宅内の西側が上位であり、祖先の崇拜、接客などが行われている点である。住宅の平面は一室、一行二室、一行三室、二行三室、二行多室の5タイプが確認でき、概ね同じような変化過程をたどっていた。居室の呼称、使い方については、一行三室までは3地域ともほぼ同じで、それ以降は違いが見られた。居室の呼称については一行三室までは位置関係で呼び、それ以降は用途で呼んでいた。居室の使い方についても、基本的には3地域とも同じであり、変化過程も似ていた。住宅の材料は7種類が認められたが、住宅の平面、建設時期と関係が見られた。敷地の形態は3種類見られた。敷地の門は3地域とも南側か南東側にあった。

7章「結論」では、各章を要約し、さらに草原地域、沙漠地域のモンゴル族住居との比較を行い、今後の研究課題をまとめている。本研究はホルチン地域（半農半牧地域）のモンゴル族の固定家屋を対象としているが、他の研究成果（シリンゴル：草原地域、アラシャ：沙漠地域）と比較して、半農半牧地域の特徴を検討している。一室から一行三室までは他地域とほぼ同じ変容過程をたどっている。しかしアラシャでは二行にならず中庭型に変化している。シリンゴルでは夏場に移動して牧畜を行うため、住宅規模はあまり大きくない。それに対してホルチン地域は一年を通じて同じ地域で暮らしていること、農業をしているため他地域とは異なり集落を形成し敷地の余裕が少ないこと、それらの理由により、住宅が北側に広がっていると思われる。また、入り口の位置、住宅内での上位の位置は他地域と同様であり、住宅の大規模化、複雑化が進んでも、モンゴル族住宅の伝統的特徴はこの二点に継承されていることがわかった。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名	イジョウ		
論文題目	内モンゴル・ホルチン地域におけるモンゴル族の固定式住居に関する研究 一半農半牧の地域を対象として一		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
要旨			
<p>本論文の学術的意義は以下の二点にまとめられる。</p> <p>一点目は、初期固定式住居から現在の固定式住居まで、その変容過程を研究対象とした点である。モンゴル族の伝統的な移動式住居については戦前から伊東恒治らの研究をはじめ膨大な研究蓄積がある。また、今西錦司、梅棹忠夫など文化人類学、民族学の分野でも移動式住居については様々な言及がされている。一方、移動式住居と比べ固定式住居についての研究は少ない。そのなかでも海日汗の研究は、固定式住居から移動式住居に変化する過程で、モンゴル族の伝統的な空間概念がどう引き継がれたかを解明しており、移動式住居から初期固定式住居の変容過程を明らかにしたものである。地域によって固定式住居が建設され始めた時期は異なるが、初期固定式住居の一室から、一行二室、一行三室、二行もしくは多室、中庭型へとモンゴル族の固定式住居は変化している。しかし初期固定式住居から現在の固定式住居まで、どのように変化発展しているのか、その中でモンゴル族の伝統的な居住空間がどのように引き継がれているかを研究したものはない。移動式住居について、移動式住居から初期固定式住居についての研究は存在するが、初期固定式住居から現在の固定式住居までの変容を対象とした研究は本研究しかなく、学術的に貴重である。</p> <p>二点目は、内モンゴル自治区・ホルチン地域の固定式住居を研究対象とした点である。内モンゴル自治区は地域性から5地域に分けられる。草原地域で牧畜を生業とするフルンボイル、シリンゴル、オルドス、沙漠地域で牧畜を生業とするアラシャ、草原もしくは丘陵で半農半牧を生業とするホルチンである。このうち草原地域における現在の固定式住居に関する研究は存在する。ただし、先に述べたように現在の固定式住居の調査であり、変容過程を見たものではない。しかし、半農半牧地域における現在の固定式住居を対象とした研究は見られない。</p> <p>以上のように、本研究は時系列的な点で、かつ地域的な点で、内モンゴルのモンゴル族住居研究の空白を埋めるものであり、学術的な意義は大きい。また、本論文ではホルチン地域</p>			

のモンゴル族世帯 52 軒を調査し、生活および生業に関する詳細な聞き取りを行うと同時に、それら 52 軒の平面プランを採取しており、貴重なデータといえる。

本論文で明らかとなったことを以下にまとめる。

① 住居の平面

住居の平面は、一室、一行二室、一行三室、二行三室、二行多室の 5 タイプが確認できた。一室は赤峰市のみで見られたが、それ以外のタイプは 3 地域で確認できた。

② 住宅の変容過程

政策的に整備された住宅を除き、これらの平面タイプは 3 地域とも一室から二行多室へと発展している。一行二室は 1978 年（第一次土地分配）までに多く建設され、一行三室は 1979 年から 1996 年（第二次土地分配）の間に多く建設されていた。二行三室、二行多室は 1997 年以降多く建設されていた。

③ 居室の使い方、呼称

一行三室までの使い方は 3 地域ともほぼ同じで、それ以降は違いが見られた。居室の呼称については一行三室までは位置関係で呼び（内の部屋、東の部屋など）、それ以降は用途で呼んでいた（台所、食堂、寝室など）。呼称を 3 地域で比較すると、通遼市とヒンガン盟は比較的似ていたが、赤峰市はやや異なっていた。

④ 使い方の変化

一室から一行二室になる際、調理、洗面と寝室、接客、食事、宗教儀式の二つに分かれ、三室になる際、年長者の寝室が分かれ、そこで接客もなされている。二行三室になると住宅が北側に拡張され調理が北側に移り、二行多室では調理、食事、接客、宗教儀式が専用の居室で行われるようになっていく。

⑤ 建築材料の種類

住居の構造材、壁材として、木造、黒粘土造、土造、石造、石造＋土造、日干しレンガ造、レンガ造の 7 種類が確認できた。木造、黒粘土造、石蔵は 1978 年以前に建てられたもののみであった。土造、石造＋土造は 1996 年以前に建築され、レンガ造は 1979 年以降に建築されていた。すべての期間で建設されていたのは日干しレンガ造であった。

⑥ 敷地のタイプ

敷地は農地と一体になったものと、農地と住宅敷地が別のものに分かれるが、後者には道路でさらに敷地が分割されたものがあり、3 タイプが確認できた。道路で分割された敷地は通遼市のみであり、赤峰市とヒンガン盟は 2 タイプであった。

⑦ 敷地の使い方

敷地の北側に母屋を設け、その回りに庭、家畜小屋、野菜畑、井戸などを配置していた。

⑧ モンゴル族の伝統的な空間構成

固定式住居は変化しており、地域によって使い方も異なる。その中で移動式住居の空間構成がすべての住居で継承されていたのは以下の二つである。一つは入り口で、住宅の南もしくは南東にある。もう一つは住宅内の西側が上位であり、祖先の崇拜、接客などが行われている点である。この 2 点は海日汗の研究で指摘されていた 4 点の内の 2 点であり、初期固定式住居に限らず現在の固定家屋にも引き継がれていることがわかった。

本論文の 3 章は日本建築学会計画系論文集（2016 年 10 月）に、4 章は家政学研究（2017 年 10 月、奈良女子大学家政学会）に、5 章は日本家政学会誌（2018 年 1 月）に各々審査論文として掲載されている。また 6 章は家政学研究（奈良女子大学家政学会）に掲載が決定している。以上のことから、本学位申請論文は生活環境計画学講座の内規を満たしている。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（学術）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。